

(要約版)

喫煙者による非喫煙者への配慮的行動は非喫煙者にどう理解されるのか

助成研究者 谷 芳恵 (神戸大学)

1. 研究目的

近年、喫煙する際の周囲への配慮意識は高まっていると考えられるが、非喫煙者からは、未だ喫煙者の非喫煙者に対する配慮のなさについて多く指摘されている。その背景には、喫煙者と非喫煙者が考える喫煙スペースにおける喫煙ルール認識、また喫煙に関する行動に対する配慮認識のずれがあると考えられる。本研究では、非喫煙者がいることによって生じる喫煙者の行動の変化を喫煙者による配慮、変化後の行動を非喫煙者に対する配慮的行動と定義し、非喫煙者と喫煙者の喫煙に対する認識の違いについて検討する。また本研究では、分煙（喫煙区域設置）により設置された喫煙スペースにおいて生じている喫煙者と非喫煙者の葛藤に着目し、喫煙者の喫煙に関する配慮的行動についての認識のずれと、それに影響する要因を明らかにすることで、分煙による喫煙者と非喫煙者との共存可能性を探る手がかりとすることを旨とする。

2. 研究方法

予備調査 喫煙者の配慮的行動項目を選定するために質問紙調査を実施し、44名（継続的喫煙経験なし 26名、経験あり 18名）から回答を得た。自由記述から、喫煙経験のない人が求める配慮としてたばこの煙やにおいに対する配慮、子ども等の特に配慮が必要な人についての言及がみられ、喫煙スペースにおける喫煙を評価する上で、周囲の他者の特性等の状況要因が影響すると考えられた。このことから本調査では、喫煙に関する行動を評価する上で同質の場面を想定することが可能であるように、喫煙スペースおよび場面・状況の設定を明確化することが必要であると考えられた。

本調査 就労者を調査対象者とし、オンライン調査を実施した。非喫煙者が仕事の打合せのために喫煙スペースを利用する場面を想定し、その場面における喫煙に対するルール認識と喫煙者の非喫煙者に対する配慮的行動に対する望ましさ評価、喫煙・たばこに対する態度、共感性について回答を求めた。調査協力者は大都市圏、都市圏中心市在住の20～65歳の就労者516名（喫煙者258名、非喫煙者258名）であった。

3. 研究成果

喫煙スペースにおける喫煙ルールについては、非喫煙者では喫煙者は非喫煙者に配慮が必要と認識している人が多かったのに対して、喫煙者は時と場合に応じて判断すべきと考えている人が多かった。また喫煙・たばこに対する態度では、因子分析の結

果、喫煙に対する否定的態度、喫煙に対する肯定的態度、喫煙に対する許容的態度の3因子が抽出された。 t 検定により喫煙者と非喫煙者の比較を行った結果、非喫煙者は喫煙者よりもたばこや喫煙に対して否定的であり、肯定的・許容的態度は低かった。

喫煙に関する行動の望ましさを評価の主成分分析を行い、非喫煙者を尊重し配慮しながら喫煙を継続する非喫煙者尊重的行動、非喫煙者を優先して喫煙を中断したり移動したりする非喫煙者優先的行動の2主成分を抽出した。各行動の望ましさを従属変数、喫煙スペースにおける配慮ルール、喫煙・たばこに対する態度を独立変数とする階層的重回帰分析（強制投入法）を喫煙経験ごとに行った結果、喫煙者、非喫煙者とも喫煙に対して許容的である人は尊重的行動、優先的行動を望ましく、喫煙に対して否定的な人は優先的行動を望まないと認識していた。しかし、喫煙に否定的な非喫煙者は尊重的行動を、肯定的な非喫煙者は優先的行動を望ましくないと認識していた。喫煙スペースにおけるルールについては、喫煙スペースにおいて非喫煙者に配慮するかどうかは時と場合によると考える人は、喫煙者、非喫煙者とも尊重的行動を望ましいが、優先的行動は望ましくないと認識しており、非喫煙者に対して配慮は必要ないと考える喫煙者は優先的行動を望ましくないと認識していた。

4. 考察

非喫煙者では、喫煙スペースであっても喫煙者は非喫煙者に配慮する必要があると考える人が多く、また喫煙者が非喫煙者に対して配慮していると思っているほど配慮されているとは認識していないことが示され、非喫煙者に対して配慮していると考え人の多い喫煙者とは、配慮度の認識に差があった。また、喫煙に対する態度については、非喫煙者は喫煙者に比べて喫煙に対して肯定的態度と許容的態度が低く、否定的態度が高いことが示され、このような喫煙者と非喫煙者の喫煙に対する態度の差が、喫煙スペースにおける喫煙に対する認識の差が生じた理由の一つにあると考えられる。

非喫煙者が喫煙スペースにおける喫煙者の配慮的行動をどう理解するかについては、喫煙に対して許容的な態度を示す非喫煙者は、尊重的行動と優先的行動をより望ましいと理解していることが示された。この結果は、喫煙スペースにおいて喫煙者と非喫煙者の共存のために非喫煙者の許容的態度が不可欠であるという見解を支持するものである。しかし、喫煙に否定的な非喫煙者は優先的行動をより望ましいと評価するのに対して、尊重的行動についてはより望ましくないと評価していた。これは、非喫煙者に対する配慮的行動が、かえって非喫煙者には望ましくない行動であると捉えられる可能性があることを示唆している。また、喫煙経験によって喫煙に関する行動の望ましさを評価の影響要因に違いが見られたことは、喫煙者と非喫煙者とは、喫煙に関する行動を理解する上で異なる基準が用いられていることを示唆しており、喫煙スペースにおける葛藤の背景にはこのような理解のずれが存在すると考えられる。

5. 結論

分煙によって喫煙者と非喫煙者の葛藤を解消し、共存していくためには、喫煙スペースにおける喫煙ルールを明確化し、共通認識がもたれる必要があり、今後分煙の意味についての再議論が必要であると考えられる。